

御嶽山の火山活動解説資料（令和7年3月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

2024年12月以降、剣ヶ峰山頂付近の火山性地震の増加や、山頂方向が隆起する地殻変動を伴う火山性微動が観測されるなど、火山活動の高まりが認められていましたが、今期間はやや低調に推移しています。

地獄谷火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年1月16日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1～2、図3－②③）

2024年12月以降、剣ヶ峰山頂付近の火山性地震が増加していましたが、今期間は、少ない状態で経過しました。震源は山頂直下の深さ1km付近に分布しています。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図3－④⑤、図4～6）

GNSS連続観測では、2024年12月頃から一部の基線でみられていたわずかな伸びは、2月頃から停滞しています。

今期間、傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

・噴煙など表面現象の状況（図3－①、図7～8、図9－1～9－3）

7日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、噴気の状況に特段の異常は認められませんでした。

剣ヶ峰山頂の南西側斜面の地熱域の温度は、長期的な低下傾向がみられるものの高い状態が継続しています。今期間、噴煙の高さは500m以下で経過しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年4月分）は令和7年5月12日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、中部地方整備局、国土地理院、東京大学、京都大学、名古屋大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、長野県及び岐阜県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『数値地図50mメッシュ（標高）』『基盤地図情報（数値標高モデル）』及び国土交通省発行の『国土数値情報』を使用しています。

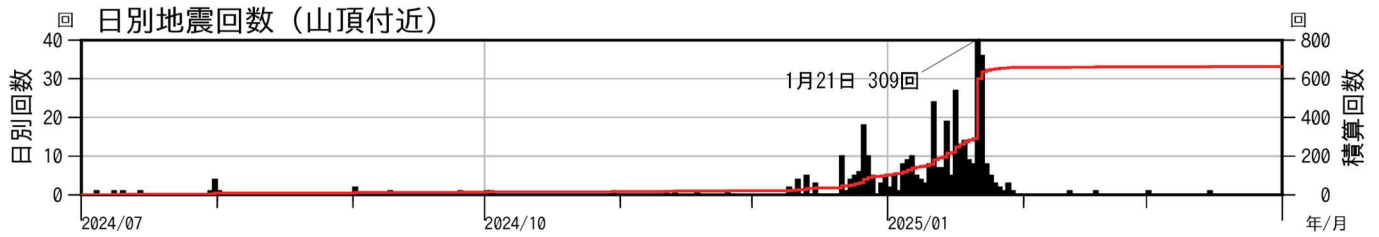


図 1 御嶽山 山頂付近の直下を震源とする地震の日別回数（2024 年 7 月 1 日～2025 年 3 月 31 日）

- ・ 剣ヶ峰山頂付近の直下を震源とする火山性地震は、2024 年 12 月中旬以降、発生頻度が高い状態で経過していましたが、1 月 22 日以降は次第に減少し、今期間は少ない状態で経過しました。

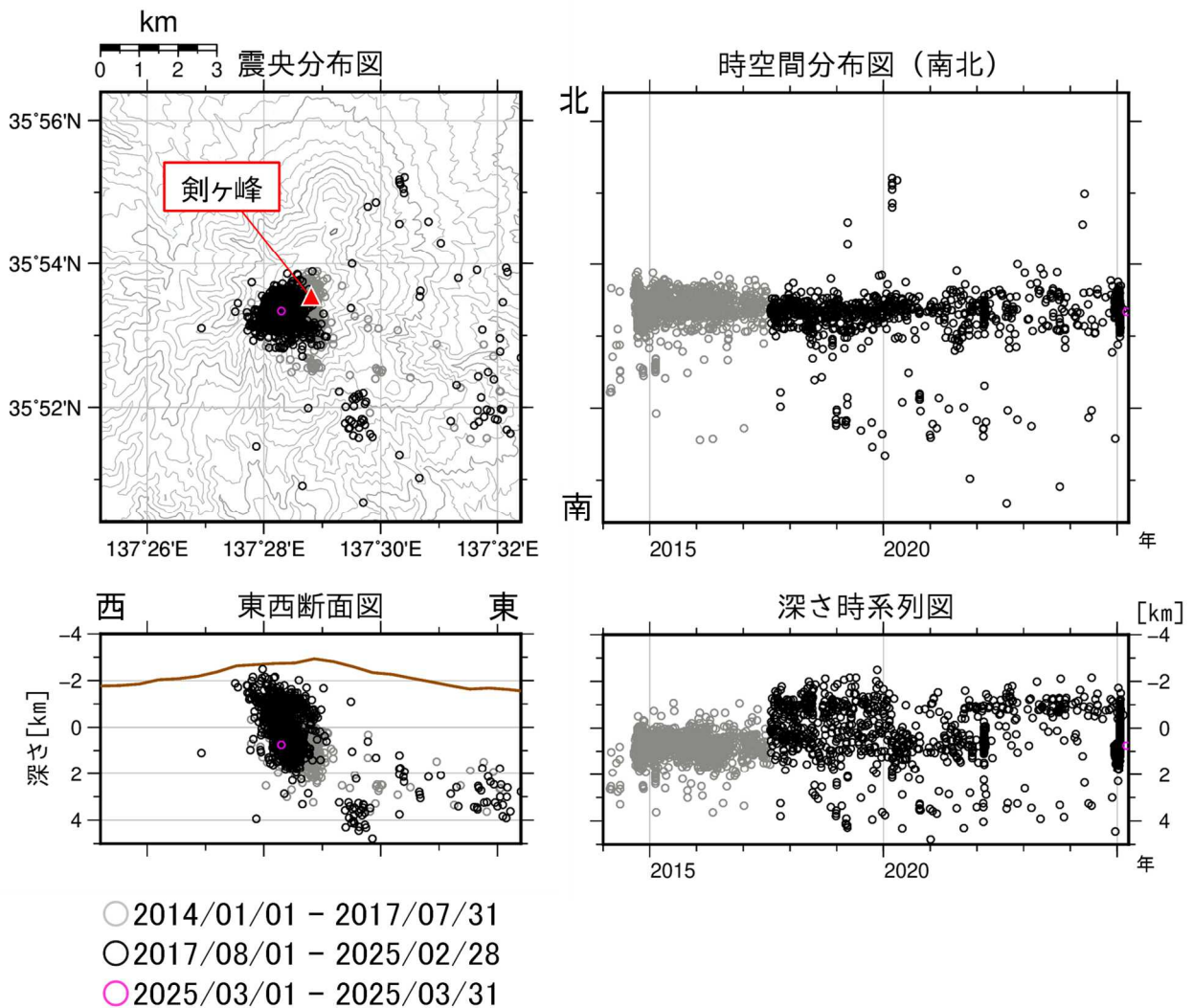


図 2 御嶽山 震源分布図（2014 年 1 月 1 日～2025 年 3 月 31 日）

2017 年 8 月 1 日以降の震源分布は、震源計算に使用する観測点を新たに追加して再計算したものを示しています。

観測点の移動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

- ・ 今期間、火山性地震の震源は、剣ヶ峰山頂付近の深さ 1 km 付近に分布しています。

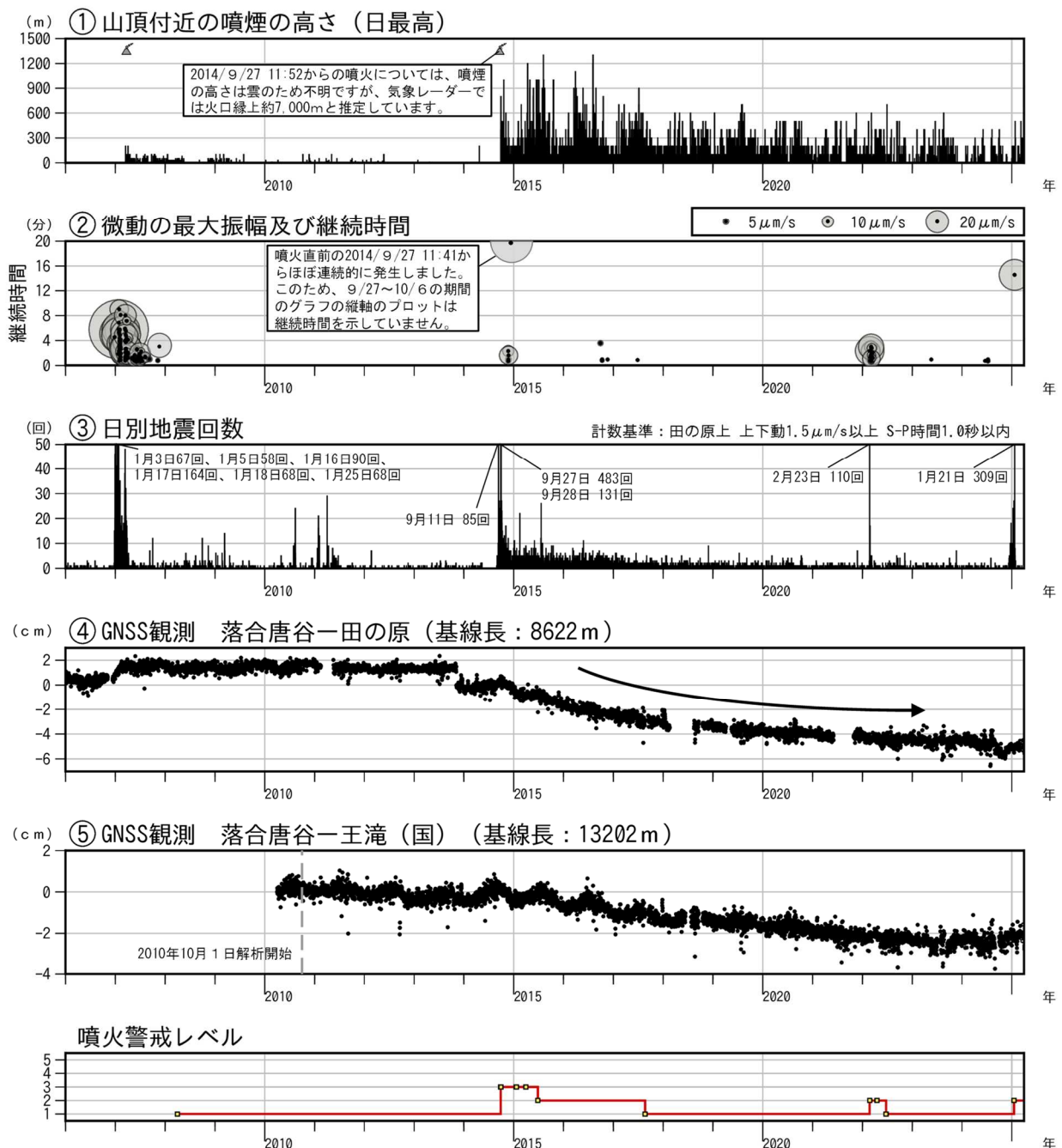


図3 御嶽山 長期間の火山活動経過図（2006年1月1日～2025年3月31日）

① 灰色の三角シンボルは噴火発生を示します。2014年9月27日11時52分からの噴火については、噴煙の高さは雲のため不明ですが、気象レーダーでは火口縁上約7,000mと推定しています。

② の振幅は田の原上観測点の速度上下動成分です（火山性微動の発生した2015年7月20日、2016年5月19日は欠測です）。

④～⑤はGNSS連続観測による基線長変化です。（国）：国土地理院

2010年10月及び2016年1月に、解析方法を変更しています。空白部分は欠測を示します。

④ではシステム更新に伴う調整のため、一部の過去データにステップ状の変化がみられています。

図中④～⑤に示す基線は、図6のGNSS基線④～⑤のそれぞれに対応します。

- ・ 今期間、剣ヶ峰山頂の南西側斜面からの噴煙の高さは500m以下で経過しました。噴煙活動は長期的には緩やかな低下傾向となっています。
- ・ 2024年12月頃からGNSS連続観測の一部の基線でみられていたわずかな伸びは、2月頃から停滞しています。
- ・ 長期的にはGNSS連続観測の一部の基線で、2014年10月頃以降、山体の収縮によって考えられる縮みの傾向が続き（例えば④矢印）、2024年頃から停滞しています。

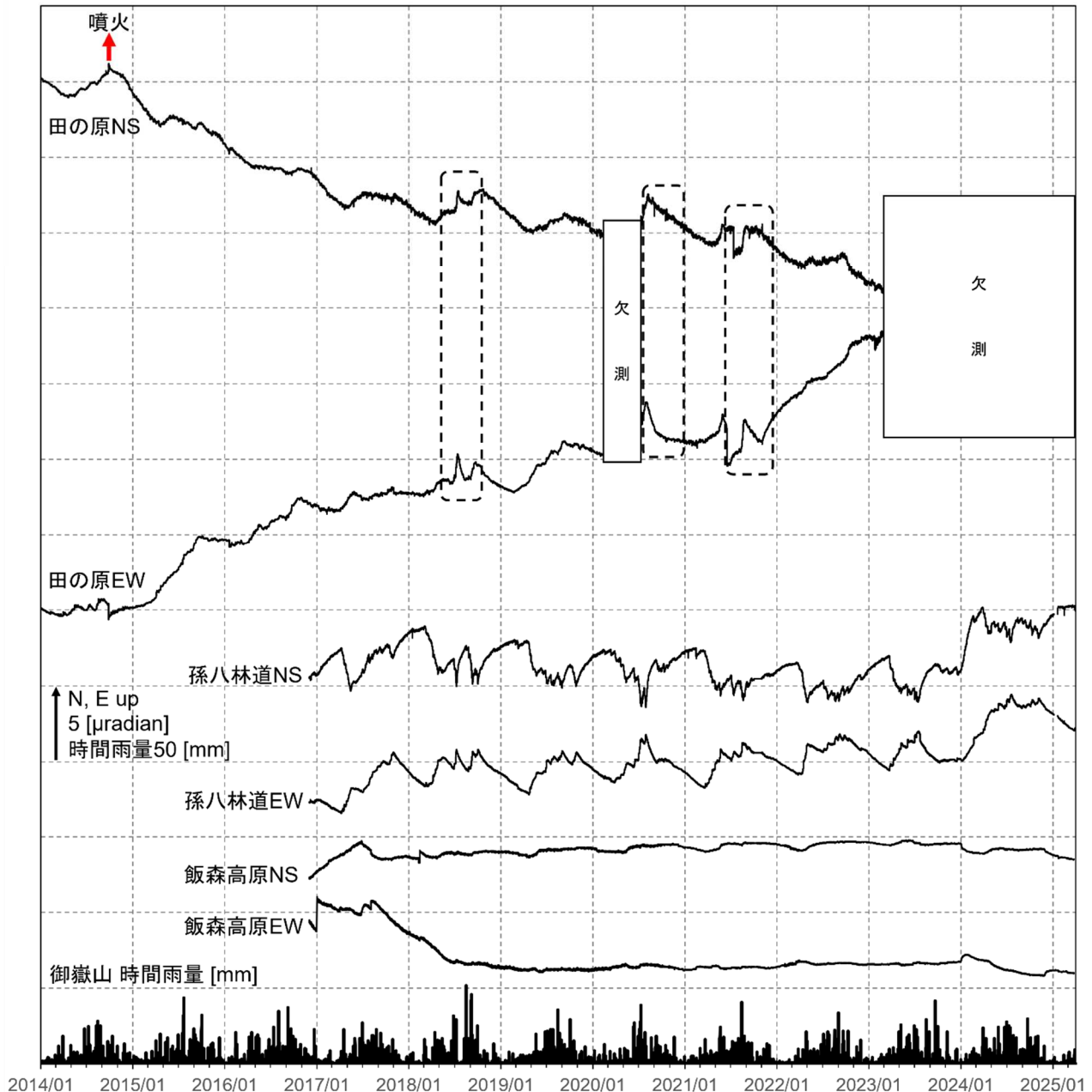


図4 御嶽山 傾斜変動（2014年1月1日～2025年3月31日）

データは時間平均値で、田の原及び孫八林道観測点のデータは潮汐補正済みです。

2018年7月頃及び2020年7月頃の破線で囲んだ部分は、降水による影響とみられる変動を示します。

2021年6月頃の破線で囲んだ部分は、降水及び田の原観測点の近傍での建設工事の影響とみられる変動を示し、空白部分は欠測を示します。

2024年1月以降、「令和6年能登半島地震」に伴うとみられる変動が認められます。

- ・今期間、傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

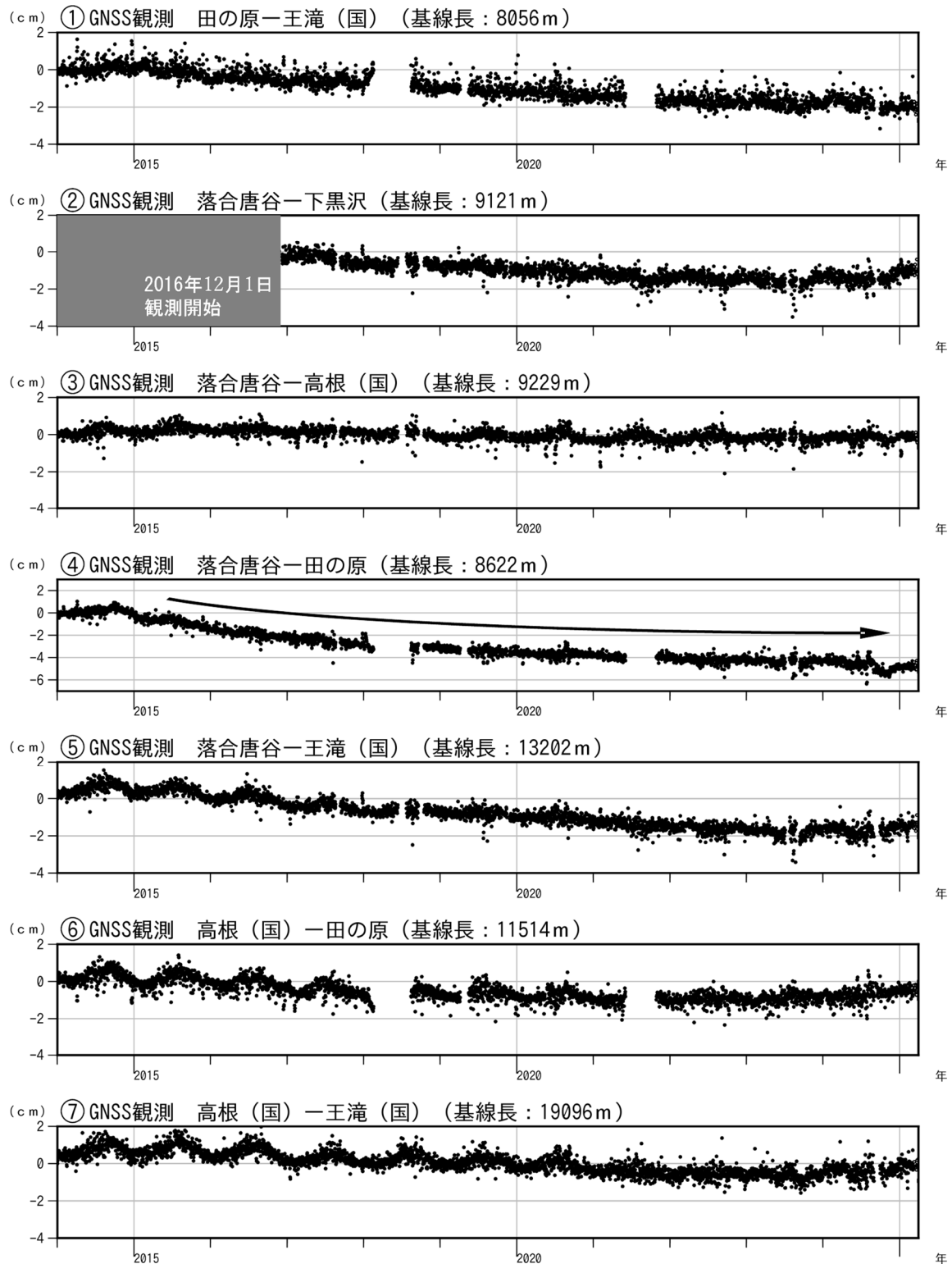
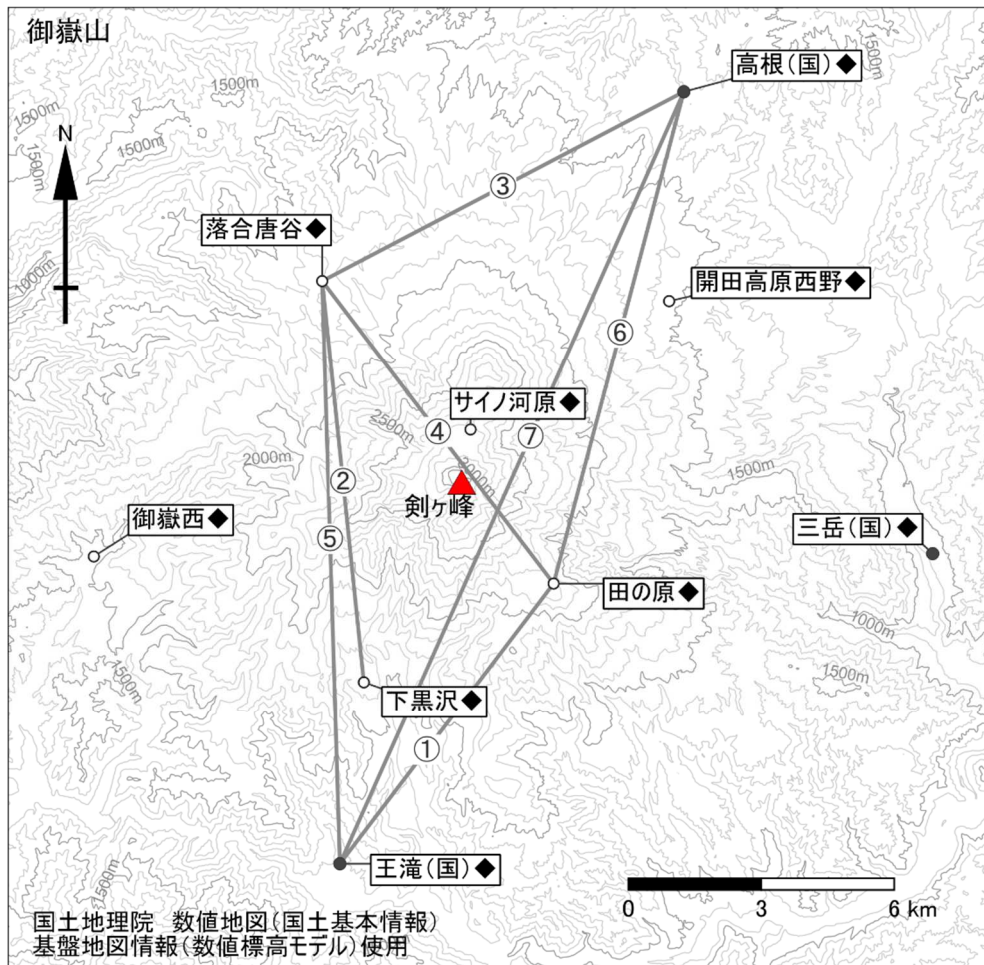


図5 御嶽山 GNSS 連続観測結果（2014 年 1 月 1 日～2025 年 3 月 31 日）

空白部分は欠測を示します。④ではシステム更新に伴う調整中のため、一部の過去データにステップ状の変化がみられています。図中①～⑦に示す基線は、図6のGNSS基線①～⑦のそれぞれに対応します。（国）：国土地理院

- ・2024 年 12 月頃から GNSS 連続観測の一部の基線でみられていたわずかな伸びは、2 月頃から停滞しています。
- ・長期的には GNSS 連続観測の一部の基線で、2014 年 10 月頃以降、山体の収縮によると考えられる縮みの傾向が続く（例えば④矢印）、2024 年頃から停滞しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国): 国土地理院

図6 御嶽山 GNSS 連続観測点と基線番号

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院

図中の GNSS 基線①～⑦は図3の④～⑤、図5の①～⑦の基線にそれぞれ対応しています。



図7 御嶽山 山頂部の噴煙の状況

上段：三岳黒沢監視カメラ 下段：中部地方整備局の滝越監視カメラ

- ・今期間、剣ヶ峰山頂の南西側斜面からの噴煙の高さは500m以下で経過しました。

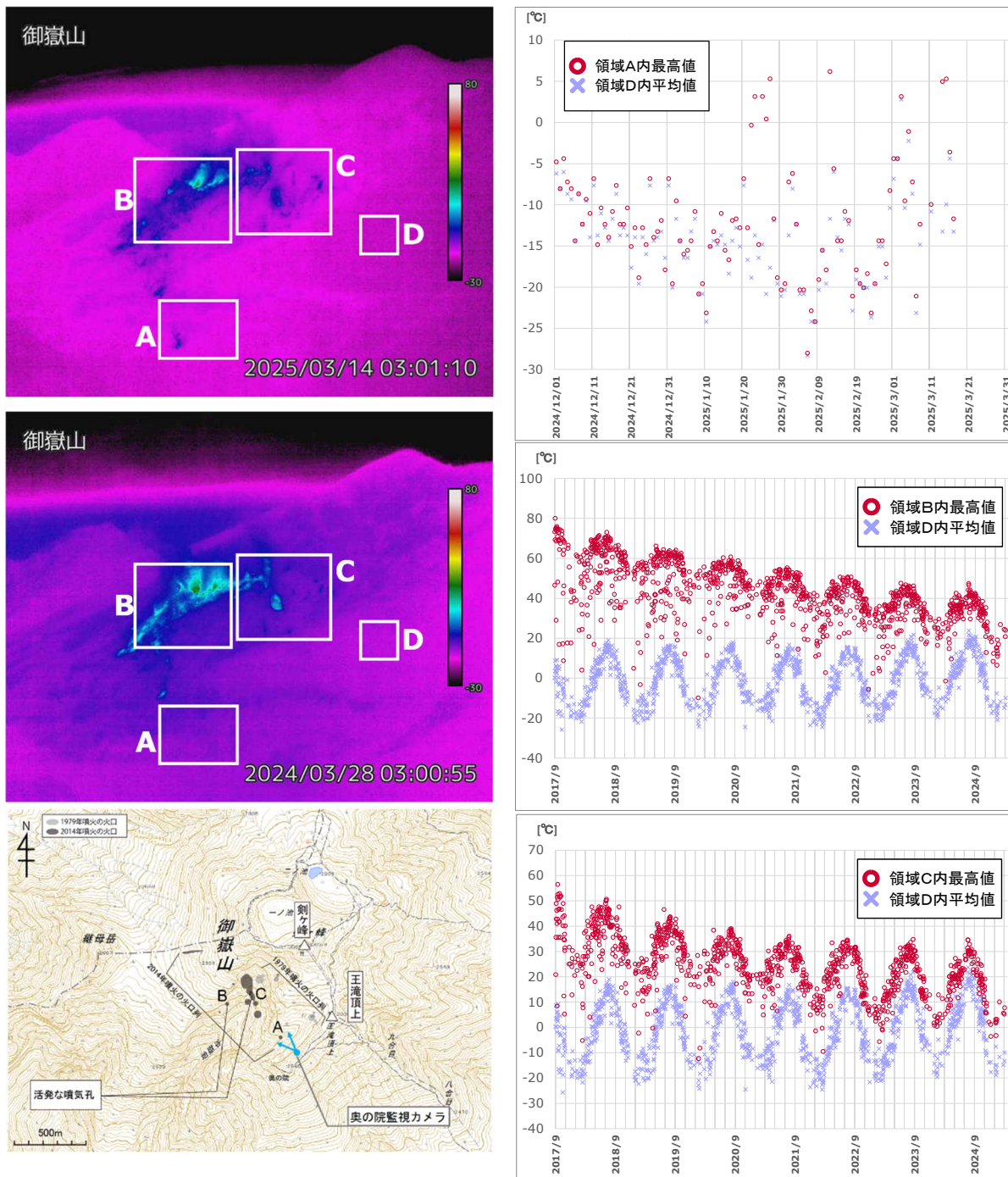


図8 御嶽山 奥の院赤外熱映像カメラによる剣ヶ峰南西側における最高温度の推移
(2017年9月13日～2025年3月31日)

左上の図は、カメラから見た各領域の範囲及び地熱域の分布を示します。

領域A～Cは地熱域、Dは非地熱域を示します

左中の図は、1年前（2024年3月）の地熱域の分布を示します。

左下の図は、主な噴気孔・地熱域の位置、カメラの位置を示します。

右の図は左上図で示した地熱域の温度変化を示します。空白部分は欠測を示します。

- ・領域Aでは1月21日16時06分からの火山性微動の発生後、噴気活動が再開（図9－2の奥の院下の噴気孔：赤破線に対応）しており、1年前（2024年2月）と比較して温度の高まりが認められます。その他の地熱域では、1年前と比較して、地熱域の分布に特段の変化は認められません。
- ・地熱域の温度は長期的な低下傾向がみられるものの、温度が高い状態が継続しています。

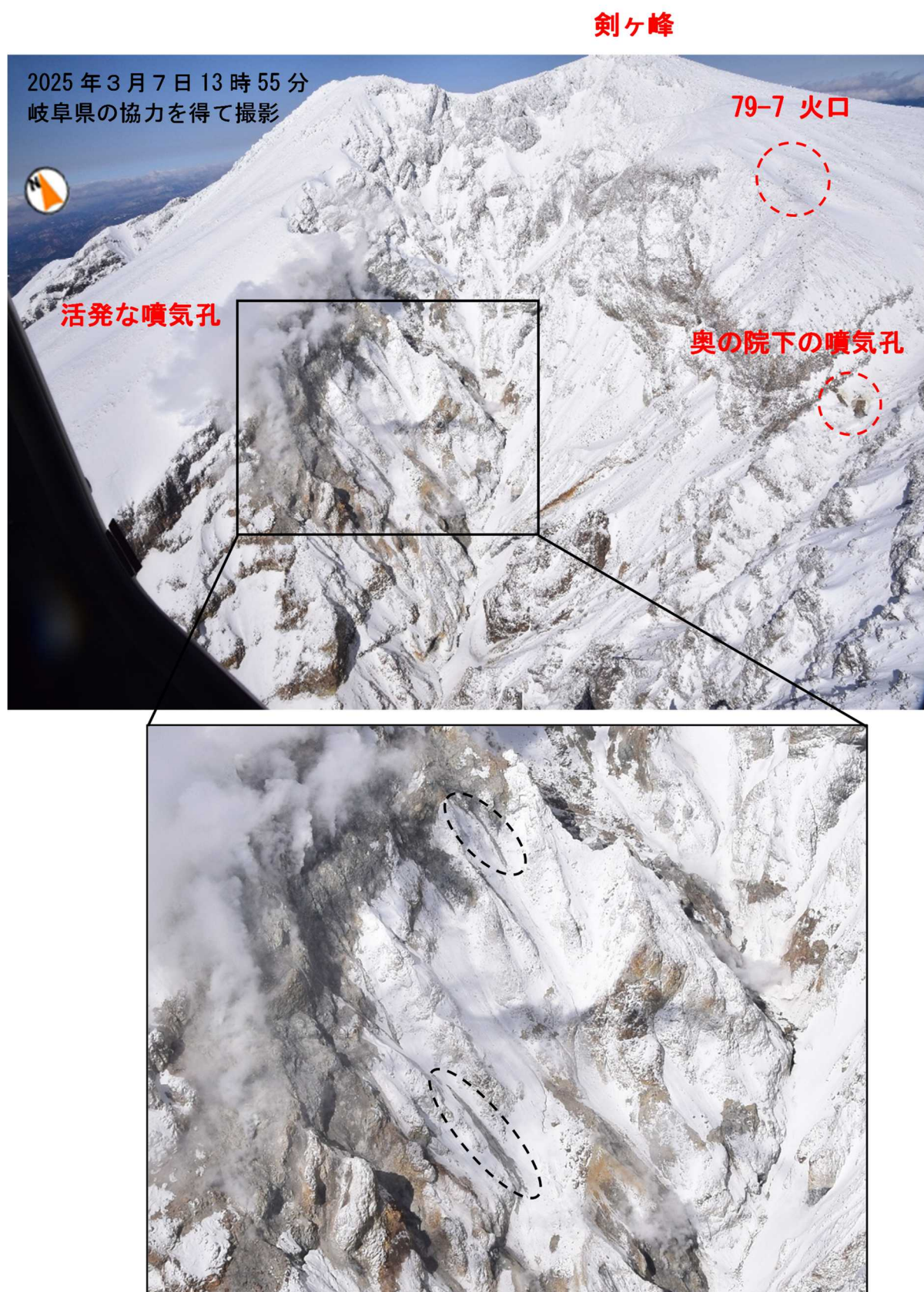


図9－1 御嶽山 地獄谷の噴気の状況

- ・地獄谷の活発な噴気活動は継続しています。一部の噴気孔から泥水が流れ出したとみられる痕跡（黒破線）が認められました。



図9-2 御嶽山 奥の院下の噴気の状況

- ・ 1 月 21 日の火山性微動の発生後に噴気活動が再開した奥の院下（図8領域A内）では、噴気は3か所から出ていることを確認しました。79-7 火口、79-9 火口、79-10 火口では噴気活動は見られませんでした。

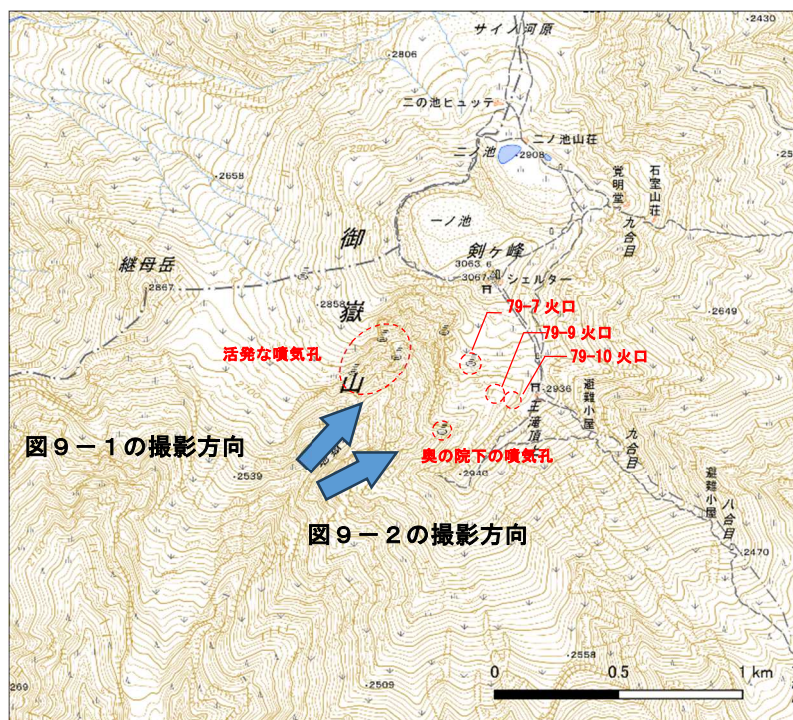


図9-3 御嶽山 写真の撮影方向

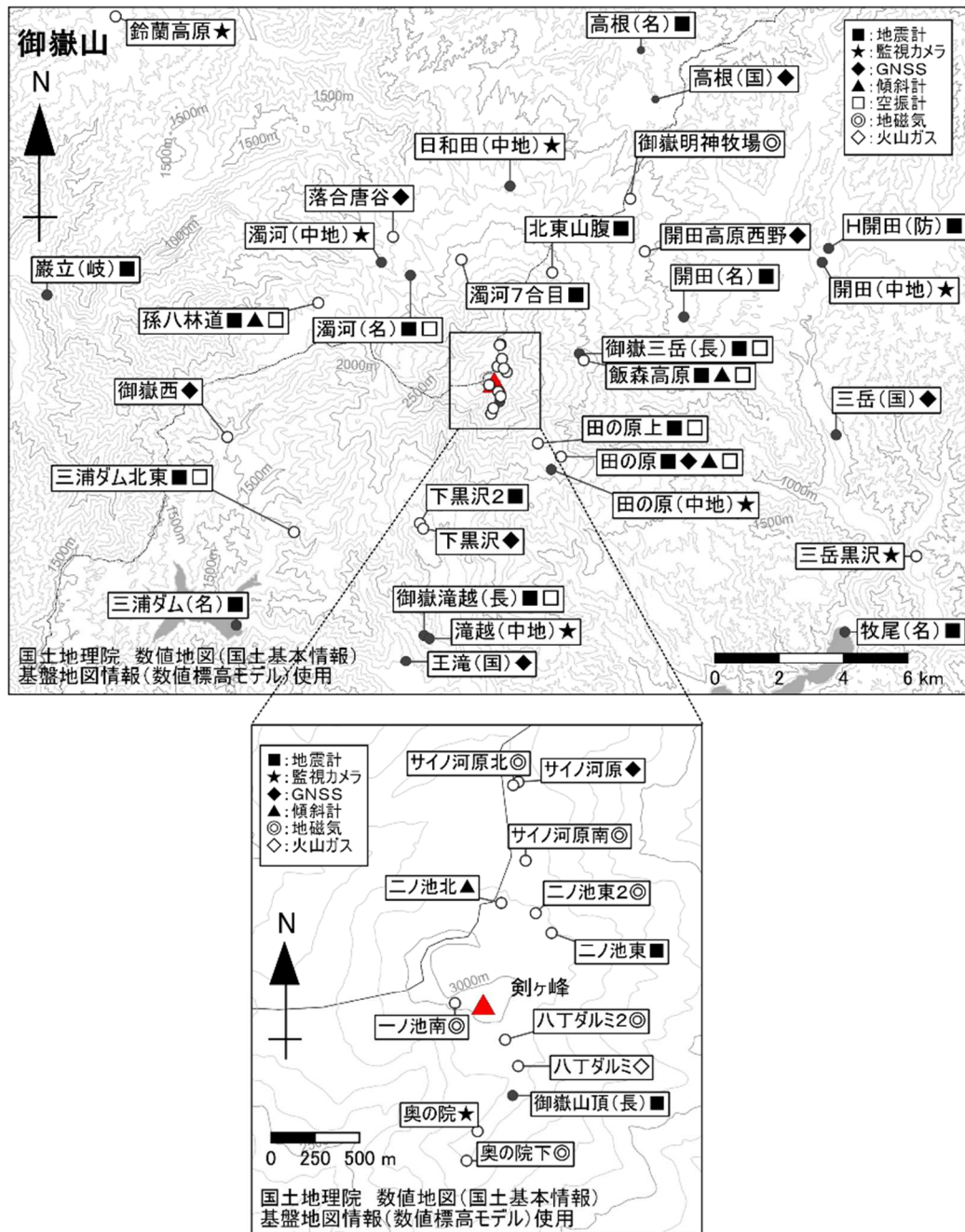


図 10 御嶽山 観測点配置図

今期間、「御嶽山頂（長）」観測点からのデータは入っていません。